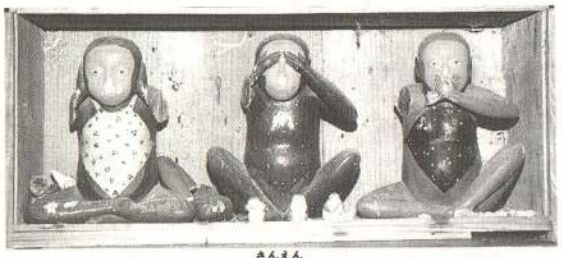

小椅の猿田彦神社にある三猿。ユーモラスな格好の猿たち、実は儒者の人生訓を語っているのです

平成4年は申年。サルは桃太郎やサルカニ合戦などの昔話にも登場するおなじみの動物ですね。

サルのことにふれながら、申年生まれの12人からうかがった〝今年の抱負〟をご紹介します。

申 今年はさる年です

ひとくちにサルといっても、体重や種類などは実にさまざま。ゴリラなどは、大きいものでは体重が二百キログラム以上もあります。一方、マダガスカルにいるミミゲコビトキツネザルは四十五グラムほどしかありません。また、ゴリラやオランウータン、チンパンジーなど、類人猿といわれる人によく似たサルもいれば、大きなシッポをもち、木の上で生活する原猿といわれるサルもいます。原猿の中には、ちょっと見ただけだと〝リス？〟と思ってしまうほど、サルらしくないサルもいるんですよ。

最北に住む ニホンザル

日本に生息しているのは、オナガザル科のニホンザルただ一種。中形で尾が短かく、顔とおしりの赤いおなじみのサルです。一頭のオスをリーダーに、数十頭の群れをなして暮らしていて、昼行性でおもに植物を食べています。ニホンザルの南限は鹿児島県の屋久島、北限は青森県の下北半島です。サルの仲間は、もともと暑い地域の動物ですが、なぜか日本には青森県の北端にまで分布し、寒さと雪に耐えて生きています。下北のニホンザルは、人間以外では最北端にすむ霊長類です。ニホンザルは北海道と沖縄にはいませんが、まず全国どこにでもいるといっていいでしょう。

十二支のうちでも、サルは日本人には特に親しまれてきた動物といえますが、そのせいか何となく低くみられているようなところもあるみたいです。ことわざには、サルにまつわるものがいろいろあります。だれもが知っているのは「サルも木から落ちる」でしょう。これはサルを木登りのベテランとしているわけですが、「サルまね」「サル知恵」などになると、サルは笑いもの扱いされてしまいます。でも大丈夫。昔話にはもちろん、古事記や日本書紀にも登場し、天孫降臨の案内役をした猿田彦命は、日本書紀に描かれた容姿からサルであるともいわれ、通路の神として道祖神におきかえられて全国各地にまつられているのです。

ヒトもサルも 同じ霊長目

ヒトとサルの共通点をあげればキリがありませんが、案外知られていないのが〝指紋〟。犬や猫にはありませんが、サルにはちゃんとあるんです。特に類人猿の指紋は人間のものと間違えるくらいで、人間と同じく一匹として同一の指紋をもったサルはいないそうです。

霊長目ヒト科ヒト属ヒト。私たち人類は、サルと同じく分類上霊長類と呼ばれる動物の一員です。でも、はたしてヒトは他の動物のように自然と共存していると言えるでしょうか。地球規模の環境破壊がいわれる今日、一個の動物に立ち返って考えてみてはどうでしょう。申年はヒトの年ともいえそうですから。

寒さに耐えて生きる、北限・下北半島のニホンザル

（写真：平凡社「動物大百科」から）

次のページへすすんでくださル？